

I. 近代歴史学の使命

I-1 歴史は事実なのか、物語なのか？

事件 (incident/event) と語り (narrative/story)

事実 ⇔ 虚構

- どちらに力点を置くかによって、歴史の性質は大きく変わってくる。
- 歴史とは、ただの事実の集積か。史学の歴史は、それと反対のことを教えてくれる。つまり、いかに歴史家が事実の集積 (=客観性) に徹していようと、そこにはつねに、歴史学者が所属した時代の刻印がある。

I-2 科学 science の歴史 = 因果律の探究

科学 (scientia) …… 「原因によって知る」こと。

近代科学は実験と批判によって得られた精密かつ明晰な (=実証的な) 対象の理解を通じて得られる知的体系 (演繹 deduction・帰納 induction を組み合わせた方法により安定した知を構築している)。19世紀、ヨーロッパおよび日本において、科学に対する信頼は無条件かつ絶対的なものにまで高められた。

But:

- ・歴史は実験不能の学問
- ・人類自身が人類の事蹟を解明しようとする歴史には、語り手の存在は不可欠
- ・歴史は人間と分離した客観的对象物ではない
(subject (主) -object (客) という安定した関係を構築できない)
 - 科学的・客観的であるために、歴史は、主観とどのように付き合っていくべきなのか。
 - 歴史は、それ自体が事実というよりはイデオロギー的なものなのだろうか。

I-3 物語批判

歴史はどのような物語か。

過去の出来事が事実かどうかを解明することが歴史のほんとうの仕事ではない。因果関係 (なぜ?) を明らかにすることが、歴史学の中心。そうした因果のつらなりをみていくと、人間の歴史は、自由の物語と考えられた。

★ 19世紀の進歩史観 (コンドルセ、コント、ランケ、トクヴィルらを経て、マルクスへ)

コント「決定的な問題、それは神も王も存在することなく社会を再組織化することにはほかならない。」

→ 人間の理性は着実に進歩 (神学的段階・哲学的段階・実証的段階) していく。自由は拡大していく。

→ 世界史の基本法則

原始共産制・氏族制社会→古代奴隷制社会→中世封建制社会→近代資本制社会→共産主義社会

→ 世界大戦や冷戦は、それぞれの国家が描いた世界史観 (物語の結末をめぐる) の争いでもあった。

ナショナリズム、マルキシズム、ファシズム、日本主義、スターリニズム、毛沢東主義、自由主義……

★ 20世紀における社会学の誕生と物語批判

ひとつの結末にむけてひとを駆り立てる歴史＝物語は、ひとびとを全体主義にむける傾向をもった。

→ 批判① 社会学（デュルケーム、ウェーバー、パーソンズ、ルーマン）

社会を類型化し、比較することで、現代の問題を解き明かそうとする。実験も可能であるし、たがいに無関係な時空間の飛び越えも可能。

Ex. ヒトラーのいる社会も、卑弥呼のいる社会も、ともに「カリスマ型社会」。

→ 批判② ポストモダニズム（デリダ、ホワイト、アンダーソンら）

ひとが読み解く資料（痕跡）の向こう側に、資料を残した者や出来事の実在を問うことは可能か。それは「想像」の世界であり、その想像の意味を現代史的に問うことはできても、実在を想定する歴史学は不可能ではないか。すなわち、歴史は物語（おはなし）にすぎない。

I-4 戦後史学を規定してきたものは何だろうか？ 必然性と運命

人間は《因果律》に囚われている。だからこそ、歴史家は事件を過去にたどっていくことができるのだし、そのことあるゆえに、歴史はそうあることの必然性を見極める学問として成り立っている。そして因果律に囚われているからこそ、条件付きではあっても、未来を見通すことが可能となる。そのことが、《歴史＝物語》の可能性を生む。しかしその一方で、因果律に囚われていること自体が、歴史家から客観的で自由なものの見方を失わせている。対象に因果律と必然性を認めながら、自分だけはその因果律から免れていると考えるのは、あまりに安易で不公平な立場。必然性を弄ぶ歴史学もまた、より高次の《運命》から逃れることはできなかった。歴史学は、因果律をめぐって、非常にパラドキシカルな問題を孕んでいる。

【アウシュヴィッツ】

《ホロコースト》を生み出した自民族中心主義史観。

※ ホロコースト（holos-kaustos/holocaustum（すべてを焼き尽くす））：ナチス政権によって行なわれた、ユダヤ人、スラブ人、ロマ人、ポーランド人、共産主義者、アナキスト、身体障害者、精神病者、同性愛者などの大量殺害を指す。死者は 1000 万人を超えともいわれる。

→ ホモ・サピエンス（理性ある人間）による狂った歴史

←ホロコーストを否認する《歴史修正主義者》たち

ゲルマン人こそ世界史の主人公となるというヘーゲル的な歴史観の末路。どのような因果律がこのような結末を用意したにせよ、その後を生きるわれわれ人類もまた、この事件によって規定されざるをえなくなるような、衝撃的な事件。

○ ハイデガーとアーレント

1. マルティン・ハイデガーの《炎》

Jetzt komme, Feuer! 今こそ来たれ、火よ！（ヘルダーリン『イースター賛歌』の第一詩句）

「しかし精神とは何か Doch was ist der Geist? …精神とは炎である Der Geist ist Flamme.」「精神の本質が燃焼に基づいている限りにおいて、精神は道を拓き、道に明るさを与えて、途上に連れてくる。炎たる精神は天を覆い、神を追い捕える嵐である。」

「詩のなかの言語——ゲオルク・トラークルの詩の論究」『詩と言葉』

2. ハンナ・アーレントによる《忘却の穴》への抵抗

完全無欠の忘却としての《忘却の穴》、およびその峻拒

——ナチスはユダヤ人の骨や髪など、あらゆる痕跡を焼き尽くし、ユダヤ人の記憶さえも抹消しようとした——

(のちに、ホロコーストを否認する歴史修正主義者たちはこの穴を再び穿とうとするだろう……)

「全体主義的支配が、善悪を問わず人間のいっさいの行為がその中に消滅してしまうような忘却の穴を設けようとしたことは事実である。しかし……すべての努力も空しかったのである。忘却の穴などというものは存在しない。人間のすることはすべてそれほど完璧ではないのだ。何のことはない。世界には人間が多すぎるから、完全な忘却などということはある得ないのである。……その教訓とは、恐怖の条件下では大抵の人間は屈従するだろうが、或る人々は屈従しないだろうということである。」

『イェルサレムのアイヒマン』1963

○ ナショナリズムと忘却

エルネスト・ルナン『国民とはなにか』

国民の本質とは、すべての個人が多くの事柄を共有し、また全員が多くのことをすっかり忘れてしまっていることです。…いかなるフランス市民も、聖バルテルミの虐殺、十三世紀の南仏で起きた異端虐殺を忘れていなければなりません。

→ ナショナリズムの本質にとって、国家が行なった暴力過程は忘却されねばならない。記憶と忘却の配分（エコノミー）が織りなす Nation-State。(Cf. ベネディクト・アンダーソン「想像の共同体」としての国民国家 Nation-State。すなわち、歴史を織りなす記憶の欠落＝忘却は想像力によって補われる。)

※ ジャック・デリダの《痕跡》の概念（≡ハイデガーの存在論的差異）

——現在の純粋性は、つねに痕跡によって汚染されている（要するに、過去なしに現在はいられない）。

☆ 《忘却の穴》に対抗するものとしての痕跡／灰

【冷戦とマルクス主義】

第二次世界大戦ののち、半世紀は、二つの超大国アメリカとソ連とが繰り広げた冷戦の時代。1938年に発見された核分裂からわずか7年で製造された原子爆弾を中心に、空前かつ破滅的な規模で展開された軍拡競争。また1953年のアイゼンハワーによる"Atom for the Peace"演説以来、原子力発電所など同じ根幹技術によって多数の施設が世界各地につくられることになった。

冷戦をたんなる軍事的な覇権争いにしない言語的深みを与えていたのが、マルクス主義。マルクス主義史学（階級闘争を駆動輪にすむ歴史はブルジョワ革命から共産主義革命に至る……）に反対する側も信奉する側も、それぞれが自国の行く末をバラ色のものと喧伝していた（マルキシストは社会主義的社会を人間進歩の頂点にすえ、パーソンズら社会学者はアメリカの自由主義社会を人間進歩の頂点に置いていた……）。

そもそも、一貫して自然史的かつ科学的に人間社会を説明しようとしていたのが、マルクス＝エンゲルスのいわゆる唯物論的歴史学だった。冷戦は、この史観が締めくくりにおいた「共産主義」をめぐる政治・経済・学問を含んで行なわれた壮大なイデオロギー闘争でもあった。

→ こうした冷戦期のイデオロギーが、望むと望まざるとにかかわらず、歴史学に影響しているだろう。

I-5 歴史の終焉——自由主義の勝利

冷戦の終結。アメリカ自由主義の勝利。物語は終わった。アメリカ自由主義自体が、社会学やポストモダニズム以上に、歴史＝物語批判の政治的实践といえた。

- 事実かどうかだけを問題にする実証主義。実証主義を非難する自由主義史観（歴史修正主義）。社会学の隆盛。
- 今日では、さまざまな問題が生じて、そのつど個別の解決策があるだけで、自由主義以上の政体を考えることができないでいる。目標を失って、誰もがその日暮らし、小さな物語を紡いで解いている。

★ いかにして歴史＝物語を再生させるか

歴史＝物語の再生を望むなら、そもそも、ひとはほんとうに自由を求めて生きてきたのかを、歴史のうえで再検討してみよう。人類はどこへ向かっているのか、自由よりも巨大なものがあるのかどうかを探求してみよう。